

李登輝生誕100年を迎えて（上）

日本台湾交流協会台北事務所広報文化室長 早川 友久¹
(元李登輝秘書)

はじめに

2023年は台湾の総統として民主化を進めた李登輝の生誕100周年であった。台湾が日本統治下にあった1923年、台湾北部の三芝に生まれた李登輝は旧制台北高等学校、京都帝国大学へと進学したものの日本の敗戦により勉学を断念し台湾に戻った。戦後、台湾が中華民国の支配下に置かれるなか、李登輝は二度の米国留学を経て農業経済博士号を取得し、研究者としての道を歩んでいたものの、その知見に白羽の矢が立ち政治の世界へと足を踏み入れる。政務委員（無任所大臣）を皮切りに台北市長、台湾省主席、副総統へと政治ポストを歴任した李登輝は、1988年1月13日、総統だった蔣経国の急逝により総統へと昇格する。蔣経国政権下で生まれていた民主化の胎動は、李登輝が総統に就任したことによって本格的な潮流となり、1996年3月には有権者が直接、総統を選ぶ選挙が実現したことで「いちおうの完成を見た」のである。1月15日生まれの李登輝は存命ならば101歳を迎えていたことになるが残念ながら李登輝は2020年7月にこの世を去っている。この節目のタイミングに紙面をいただく光栄な機会を得たので、台湾でも日本でも多くの人から敬愛される李登輝の身近に仕えた経験を踏まえ、いくつかのキーワードとともに李登輝生誕100年を偲ぶよすがとしたい。

1. 理想とするリーダー像

李登輝の名を聞いて「リーダーシップ」を連想する人は少なくないだろう。事実、国や地方の議員、企業の経営者やメディア関係者など、多くの日本人から李登輝の話を聞きたいという要望が引きも切らなかったが、希望のテーマについて尋ねると、「リーダーシップについて」を望む声が多かった。やはり、一党独裁体制のなかから困難を乗り越えて民主化へと舵を進めた李登輝の指導力の一端に触れたいという思いからであろう。そんな李登輝が「理想とするリーダー像」とするのは意外な人物であった。

日本からの表敬訪問を受けると、李登輝は来客に向かって「実は毎日、テレビで『暴れん坊将軍』を見ているんだ」と漏らすことがあった。実際、100チャンネル以上がある台湾のケーブルテレビの番組は多彩で、時代劇の暴れん坊将軍が中国語の字幕付きで毎日放送されているのである。それを聞いた来客は、「えっ、台湾の元総統が毎日、暴れん坊将軍を見ているんですか」と半ば驚きながらも笑いに包まれるのである。ただ、李登輝は単なる時代劇ファンなのではない。なぜ暴れん坊将軍が好きなのか。「暴れん坊将軍こと8代将軍吉宗は、ずっと江戸城に籠もり、報告だけを受けて政治を進めているのではない。たびたび旗本の三男坊に扮して江戸の町に繰り出し、人々が何に困っているのか、江戸の町にはどんな問題が起きているのか、人々は何を望んでいるのか、を自分

1 本稿の内容や意見等は日本台湾交流協会の公式見解を示すものではなく、全て執筆者個人の経験に依拠する内容及び意見である。また、本稿中の人物の組織名・肩書きは当時のものである。なお、筆者は2012年から9年間、日本人秘書として李登輝元総統に仕えた。

の目を見て、自分の耳で聞こうとしている。」そして、この「姿勢」こそが「リーダーとしての理想」だ、と李登輝は言うのである。つまり、吉宗の頭のなかには常に「江戸の町と江戸の人々」のことがあり、これは言い換えれば「国家と国民」が常に頭の中にあるということである。この「姿勢」こそが国家の指導者として忘れてはならない態度なのだというのだ。毎度、「だから私は暴れん坊将軍が大好きなんだ」と笑う李登輝だったが、なにゆえ暴れん坊将軍が好きなのかという理由を聞いた日本からの来客の方々は「なるほど、さすが李登輝総統である」と唸るのが常であった。

この「国家と国民が常に頭の中に」という政治信念は、1995年に台湾の現職総統として初めて訪米を実現した際、母校コーネル大学で講演したテーマにもよく表れている。李登輝は、中国の古典「尚書」から「民之所欲、長在我心（民の欲するところ常にわが心に）」の一節を掲げ、この言葉こそ自身が総統を務めるうえでの原則であると述べたのである。実際、この訪米をきっかけに中国は李登輝に対する不満を高め、翌年3月に予定された初めての総統直接選挙の実施と相まって台湾の南北海域へ演習と称してミサイルを打ち込み、台湾海峡危機の火種となった。しかし、李登輝は台湾に民主主義と自由をもたらすことこそ台湾の人々の欲するところと捉え、中国の脅威に怯えることなく選挙を敢行し、名実ともに初代の民選総統として選出されるのである。

また、李登輝はいくつもの造語で自身の政治哲学を表すことを得意としたが、特に政治家として、国家の指導者としての心構えを表した言葉に「我是不是我的我(私は私ではない私)」がある。一見、なにやら禅問答のように聞こえるため、多くの方が様々な解釈をされているし、李登輝もそれぞれの解釈があって良いと考えるだろうと思う。ただ、李登輝自身の解釈はこうだ。「指導者として政治に関わる以上は、全身全霊すべてを『公』のために捧げなければならない。つまり『私』という部分があってはならず、李登輝という『私』を捨て去り、『私ではない私=公』の李登輝になることを常に追求しなければならない」という意味だ。李登輝曰く、戦後の台湾は国民党が持ち込んだ「皇

帝による統治」の時代が長く続いた。ときの王朝の皇帝が「私」の意のままにまつりごとを進める中国式価値観だという。しかし、民主主義社会の台湾において最高指導者になるためには「私ではない私」になることを追求し続けなければならない。そこで、敬虔なキリスト教信者だった李登輝が、折に触れて手に取っていた新約聖書「ガラテヤの信徒への手紙」にある一節をモチーフとし、自身の政治信条を表すために作った造語であったが、特に政治家から揮毫を求められたときには好んでこの言葉を選ぶのが常であった。

2. 台湾の民主化実現のカギ

李登輝は、「自分は22歳まで日本人だった」と言って憚らなかったし、「日本が理想として作り上げたのが李登輝という人間」と言うことさえもあった。戦前の、自由な学風のなかで教養を重視する旧制台北高校のエリート養成教育を経て作り上げられた自身のバックグラウンドを自負する意味もあったのだろう。そのため、在任中も退任後も、「日本びいきが過ぎる」と批判されることもあっただけでなく、あまつさえ「実は李登輝の両親は日本人であるがゆえにかくも媚日なのだ」というデマが流布されたこともあった。その理由は、李登輝が190センチ近い長身なのに、父親はさほど背が高くないから、という根拠に乏しいものであった。李登輝は苦笑しながら「確かに親父は小さかったが、実は母は当時の女性としては長身でノミの夫婦だった」と言うのである。確かに日本統治下で撮影された家族写真を見ると、李登輝の母親の押し出しががいいのを見てとれる。

1999年、台湾中部で発生した921地震によって台中市にあった日本人学校も全壊したが、新校舎の再建式典に李登輝は夫人を代理として出席させた。出席するとまた「日本に媚びている」などの批判が出るためだったという。

望むと望まざるとに拘わらず、台湾の政治家として最高ポストの総統にまで上り詰めた李登輝だったが、今もなお台湾政治における最大の謎とも言われているのが「なぜ蔣経国は李登輝を抜擢し続けたか」である。蔣経国はその理由を李登輝本人にも告げたことはなかったというし、公開さ

れた蔣経国日記にもその謎を解く記載はなかった。肝心の当事者がすでにこの世にいないので、多くの関係者が様々な持論を展開するばかりであるが、李登輝自身も蔣経国に尋ねたことはなかったという。筆者も何かの話の延長でそのことに話題が及んだ際、李登輝に聞いてみたことがある。李登輝は「これは私の推測だが」と前置きしたうえで次のように話した。

「おそらく蔣経国は私の中に『日本人』を見たのだろう。あるいは『日本精神』と言ってもよいかもしれない。蔣経国はソ連に留学していたから、外から客観的に中国や国民党というものを観察しただろう。私はもともと農業経済の学者で、台湾の農民の暮らしを少しでも楽にしてやりたいのが目的だったから、農村改革のために政治の世界に引っ張られたからといって、少しでも良いポストを得たいとか、もっと出世したいという欲がなかった。そのかわり、会議に出れば仕事のために、政府にとっては耳の痛いようなこともズバズバ言うし、蔣経国にすり寄ることも必要なかった。そういう私の姿勢のなかに蔣経国は『日本精神』を見たんじゃないかと思う。」

「日本精神」とは、最近では台湾で耳にすることも少なくなったが、日本統治下で教育を受けた世代、つまり李登輝に代表される世代がまだ元気だった2000年代まではよく耳にする言葉であった。司馬遼太郎『街道をゆく 台湾紀行』に「老台北」の名で博覧強記の水先案内人として登場する蔡焜燦の著作『台湾人と日本精神(リップンチェンシン)』で一躍日本人の間でも知られるようになったが、台湾語で使われる「日本精神」とは「勤勉である・約束を守る・礼節を重んじる・嘘をつかない・勤儉である・清廉潔白である」ことを意味するのだという。

蔣経国による李登輝の重用は、「催台青」と呼ばれる本省人若手エリートの登用政策の延長と解釈できる向きもあるだろう。しかし、それが全てではなく、李登輝自身が感じていたように、国民党といえども一枚岩ではなく、お互いが牽制しあう権力闘争のなかで、蔣経国は李登輝を異質なものと捉え、その異質さの原因たる「日本的なもの」を評価したのかもしれない。自分の推測を披露し

た李登輝が「おそらく当たっているだろう」と付け加えたのを今も覚えている。

李登輝の総統就任時、すでに野党の結成は黙認され、世界最長の戒厳令も解除されていたが、李登輝は国民党内で微妙にバランスを取りながらも、民主化、自由化を着実に進めていく。91年には「動員戡乱時期臨時條款」を廃止して国共内戦を事実上終わらせ万年国会を解散、92年には刑法100条を改正して完全な言論の自由を実現させた。また、97年には憲法改正により中華民国の一省としての位置付けだった台湾省を凍結して実質的に廃止、99年にはドイツの放送局のインタビューに対して中華民国は建国以来、一貫して主権独立国家であり、「特殊な国と国との関係」であると発言した。言い換えれば、兩岸それぞれに国家があるとの認識を示し、台湾は中国とは別個の存在であることを強調したのである。蔡英文は2022年の国慶節演説において、李登輝の「二国論」をトレースするかたちで「中華民国と中華人民共和国は互いに隷属しない」と発言したが、さもありなん、蔡英文は李登輝政権期に国家安全会議諮問委員として「二国論」の起草に携わっていたからである。

閑話休題。蔣経国は李登輝のなかの「日本的なもの」を評価して副総統にまで抜擢し、その結果、李登輝は12年にわたって総統を務め、台湾の民主化を進めた。その過程に多くの困難があったことは想像に難くないが、それでもなお民主化をやり遂げた信念の源はなんだったのか。前述したように、台湾の民主化は「民の欲するところ」であり、政治家として国家の指導者となった以上、「私」を捨て去ることを追求しなければならないと考える李登輝であるから、「公」のために民主化を進めようという意志は理解できるが、その原動力はなんだったのか。愚問と思いつつも率直に尋ねた私に、李登輝の答えは明快だった。「日本教育だよ。李登輝という人間はつま先から頭のとっぺんまで日本教育で出来ている。人として生まれてきたからには『公』のために尽くせ。そう叩き込まれてきたんだ。だから私は総統になって権力を手にしたときも、『私』のことは全く考えることなく『公』のために使おうと決心できたんだ」。そして李登

輝はこう続けたのである。「だから私が最後まで決意を貫き通して台湾の民主化を成功させられたのは、日本のおかげでもあるんだ」。

3. 祖国とは国語

率直に言って李登輝の母語は間違いなく日本語であった。それもむべなるかなで、李登輝は本島人（日本統治時代における台湾人に対する呼称）でありながら家庭でも日本語を常用する「国語家庭」であったため、家庭の内でも外でも日本語で生活する環境で育った。ただ、李登輝によると「やはり台湾人だから」という理由で公学校高学年の頃から近くの廟で開かれていた台湾語の塾へ通わされたという。また、「22歳まで日本人だった」と述懐するとおり、李登輝が中国語を習い始めたのは戦後、国民党が台湾にやって来てからである。総統在任中はあまりにも中国語の発音が下手くそなのを新聞で批判されたこともあったというが、大学を卒業するような年齢で新しい言語を身につけることは容易ではない。李登輝の中国語を批判した記事を書いたのは若い記者だったというが、「その記者はなぜそんな記事を書いたのか。それは台湾の歴史を教えられていないからだ。歴史を知らないから、なぜ私の中国語がこんなに下手なのかが分からない。これもまたひとつの『台湾の悲哀』だな」と李登輝はその記者に同情さえ寄せるのである。

李登輝は退任総統ゆえに相応の礼遇が与えられており、李登輝が乗る車両は白バイやパトカーが先導し、信号は制御されるのでノンストップで移動する。また、SPに相当する警護人員が付く。歴代総統には蔣経国が「七海」、陳水扁が「玉山」、蔡英文が「永和」というように、いわばコードネームが付けられる。李登輝のそれは「大安」であり、国家安全局に所属する「大安組」のSPが李登輝自身や自宅を警護するのである。李登輝が事務所へ出勤して来たり、外出する際には必ずSPが同行するわけだから、筆者も自然と同世代のSPたちと親しくなっていく。ある時、SPたちにこう言われたことがある。「お前の喋っている中国語はラオパンの中国語と同じだ」と。この場合のラオパンとは中国語で「オヤジ」の意味であり、秘

書や書生たちが親しみを込めて自分が仕える政治家を呼ぶのと同様である。さて、私と李登輝の中国語が「同じ」とはどういうことか。彼らに言わせると「言っている意味は分かるが、なんとなくちょっと違う。どうも外国人が喋っている中国語のような感じ。それからたまに日本語っぽい単語が出てくる」のだそうだ。筆者も自覚していることだが、中国語の文法の語順がネイティブたる台湾の人々とは異なっていたりすることがある。要は、頭の中で、日本語で考えたことを中国語にしているからどうしても日本語的な文法に中国語が「引っ張られる」のであろう。あるいは、台湾も日本も同じ漢字を用いており、なおかつ台湾では繁体字という「正統な」漢字が使われている。そのために、日本語の単語を試しに中国語読みしてみると意外に通じることも少なくない。もちろんこれだけ多く日本の商品が流入し、日本のドラマや映画もふんだんに目にしている台湾の人々だからこそ、というのも一因かもしれない。いずれにせよ、通じることは通じるが、「台湾人は普段そんな言い方しない」という表現を筆者も李登輝もたまに使うのだそうだ。SPたちが抱く、これらの「違和感」の原因は、間違いなく筆者の母語が日本語だからということであろうし、畢竟、李登輝のそれもまた日本語だからということになるであろう。

もうひとつ、興味深いエピソードをご紹介したい。前述したとおり、李登輝にとって中国語は、長じてから身につけた、いわば「外国語」であった。総統を退任して年齢を重ねてくると、中国語で話す機会は減っていき、講演や挨拶なども台湾語で行うのが常となっていたが、この台湾語原稿の草案を作成するのは、台南出身の同僚の役目だった。台湾南部では家庭だけでなく街なかでも日常的に台湾語が使われている。そのため、台北をはじめとする北部の人たち、特に若者のなかには「台湾語は分からない」、「聞いて理解できるけど話せない」という割合が非常に高いが、南部の人たちにとっては台湾語を自由自在に操る人たちも多い。ある時、李登輝の執務室へ入り、講演原稿の打ち合わせをしてきた同僚がニヤニヤしながら私のところへやって来た。今さっき李登輝に見

せた原稿にはなにやら鉛筆でよみがなが振ってある。よく見るとよみがなはカタカナで、それは台湾語の単語のよみがなだというのである。聞いてみると、同僚曰く「ラオパンの台湾語はそれほど上手じゃないよ」という。つまり、同僚が作成した原稿のなかに「禁忌」という単語があったのだが、李登輝は禁忌を台湾語でどのように発音するか知らなかったのだそうだ。そこで「何と読むんだ」と聞かれた同僚が「禁忌は台湾語で『キンキー』です」と答えると、李登輝はおもむろにカタカナで読み方を書き込んだのだという。それが面白くて同僚は私に見せに来てくれたわけだが「やっぱりラオパンの母語は日本語なんだな」と言うのも忘れなかった。事実、日常的に日本語を使う「国語家庭」出身というだけでなく、旧制台北高校から京都帝国大学へと日本語で高等教育を受けた李登輝にとって、まさに思考を司る言語は間違いなく日本語だったのだと思う。

「祖国とは国語」とは、ルーマニアの思想家エミール・シオランの言葉だが、シオランはこう言っている。「我々はある国に住むのではない、ある国語に住むのだ。祖国とは国語だ。」誤解を恐れずに断言すれば、この意味で、李登輝の祖国とは日本であったのだろう。しかし、日本の敗戦は統治する側の日本と、される側だった台湾の50年にわたる関係に終わりを告げた。それによって台湾は日本の手を離れ、国民党の支配下に置かれることになり台湾に中国語の社会が出現したのである。戦後の台湾社会では、家庭内はさておき、公の場で中国語以外の言語を話すことはご法度であった。学校でうっかり台湾語を話すと、罰として「方言札」と呼ばれる木の板を首からぶら下げられて立たされたという。ある台湾人は「あいうえおが一夜にしてボポモフォ（中国語の発音記号のこと）に変わった」と表現して言語の変化を嘆いたが、李登輝もまたそのうちの一人であっただろう。李登輝の自宅に行くと、夫人の曾文恵の話し相手になることも多かったが、曾文恵は筆者に向かって幾度となく言ったものである。「早川さん、主人はね、台湾の総統までやってくせに、いつだって日本のことを心配してるのよ。」戦後、学者としての道を歩みながらも、請われて入った

政治の世界で李登輝は総統にまで上り詰め、台湾の民主化を成し遂げた。そこには間違いなくひとりの台湾人として台湾を良くしていきたい、台湾の人々に民主主義と自由をもたらしたいという希望があった。しかし同時に、「かつての祖国」である日本のこともまた気懸かりであり、心配であり、その行方をいつも気にかけていたのである。李登輝は日本人に向けて、特に若い日本からの来客に向けて講演すると、「日本がリーダーとなってアジアを引っ張って行ってほしい。覇権国家の中国がアジアのリーダーになると世界中が迷惑する。日本が同じ民主国家の台湾と手を携えてアジアをリードし、国際社会で活躍することがアジア全体の利益になるのだ」と毎度のように訴えていた。李登輝にはいわば台湾と日本という「二つの祖国」があり、このどちらの未来に対しても李登輝は大きな関心を寄せていた。そして「だからこそ、日本には強くなってほしい」と願い続けていたのである。

4. おわりに

99年に台湾中部で921地震が発生した際、世界で最初に救援隊を台湾に送り込んだのは日本だった。筆者が台湾へ留学に来たのが2007年だったが、その当時でも筆者が日本人だと分かると「真っ先に台湾に来てくれたのは日本だった」と感謝されることも少なくなかった。その数年後、311大震災で傷ついた日本に、有形無形の大きな支援を寄せてくれた台湾に対する感謝の気持ちは、筆者を含めて多くの日本人が今もなお共有しているだろう。また、コロナ禍では、2021年5月に市中感染が急拡大した台湾に対し、日本が迅速なワクチン寄贈を実現している。6月4日のあの日、ワクチンを載せた日航機が桃園国際空港へと飛来する光景を、台湾の全ニュースチャンネルが生中継していた。当日、日本台湾交流協会台北事務所には足の踏み場もないほどの感謝の花が届けられ、担当者は嬉しい悲鳴を上げていたとも聞く。台北101ビルや圓山大飯店はライトアップで日本への謝意を示し、SNS上では「謝謝日本」の言葉が踊った。先日の能登半島地震では、台湾から早々に巨額の義援金が贈られたことは周知の

通りであり、まさに日本と台湾が「善の循環」で結ばれているのは間違いのない事実なのである。

日本台湾交流協会が台湾で2021年度に行った調査によると「最も好きな国」は日本が60%でダントツの首位であった。しかし、「台湾に最も影響を与えている国」となると日本は3位に順位を落とし13%、1位は米国の58%で、2位は中国の25%であった。この設問は台湾の安全保障を念頭に置いたものと推測されるが、やはり「いざというとき」に頼りになるのは、国内法たる台湾関係法で台湾の防衛を維持することを定めている米国であった。ただ一方で、台湾民意基金会在2022年3月に行った調査によると、「もし中国が台湾に武力侵攻してきた場合」について、「米国は軍を派遣して助けてくれるか」、「日本は軍を派遣して助けてくれるか」のそれぞれで、「助けてくれると信じる」割合は米国が34.5%、日本が43.1%と、日本に対する期待が米国を上回る結果であった。米国への信頼度が揺らいだ要因分析

については他に譲るが、日本に対する期待の高さには、日本からのワクチン寄贈が大きく影響しているのだろうと筆者は考える。921地震の救援隊も、ワクチンも、台湾に手を差し伸べたのは日本が一番だった。2番目はどこなのか、寡聞にして知らない。やはり外交の現場においては「一番じゃなければダメなんです」ということを痛感するが、誰よりも先に助けに来るということはそれだけ大きなインパクトを残し、手を差し伸べられた側は長い間、感謝の気持ちを持ち続けることの証左であろう。李登輝の「日本には強くなってほしい」という願いは、安全保障の面だけに限らない。台湾の隣に、何かあれば率先して台湾に寄り添い、手を差し伸べ、支援してくれる頼もしい存在がいてくれることを願っていた。

今、日本と台湾の関係がどちらかの片思いではなく、李登輝が願ったような、お互いに助け合う関係になりつつあることを、李登輝の側に仕えた日本人としてうれしく思う。